

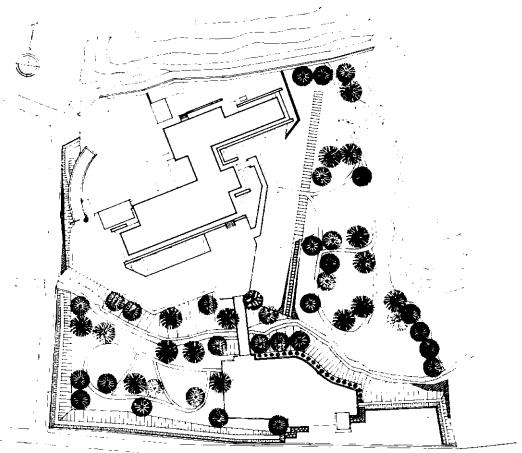
飛鳥資料館の建設

飛鳥資料館学芸室

飛鳥地方の文化財の保存活用と住民の生活向上とをどのように両立させるかをめぐっては、とくにこの数年来、ひろく関心があつめている。この問題が国の政策としてとりあげられ、その具体策の1つとして歴史資料館の設立が決定された(1970・12・18閣議決定)。

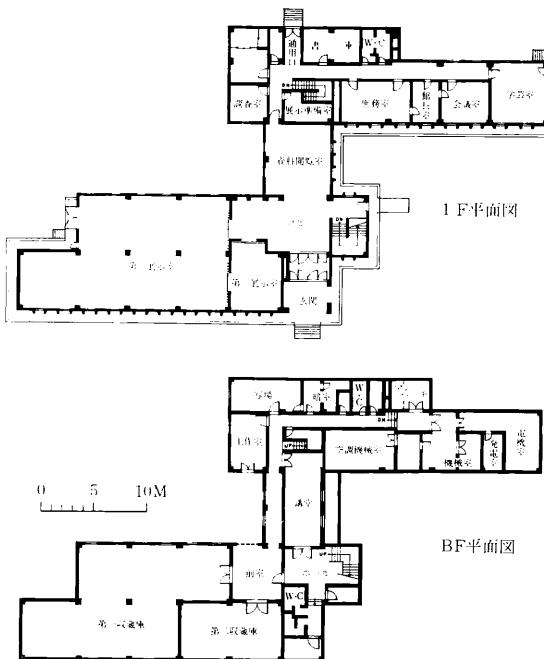
資料館の建設は1971年度の用地買収(奈良県教育委員会に買収事務を依頼)から始まり、同年には学識経験者による設置準備会議が発足して、文化庁として建設及び展示の基本構想を検討すると共に建物の基本設計を谷口吉郎氏に依嘱した。なお当初、文化庁は、資料館を独立機関として設立しようと考えたが、結局、当研究所に付属して設けられることになり、1974年4月に発足の運びとなった。以来、学芸室では、所内の準備委員会の助言を得て、具体的な準備をすすめて現在にいたっている。

資料館の敷地としては明日村奥山が選ばれたが、ここは桜井方面から飛鳥地方へ入る関門に当っており、その県道の北に接し東と北を低い丘で囲まれた比較的狭い谷間が用地となった。これは近代的な建物の建設が飛鳥地方の歴史的景観を出来るだけ損わないようとの配慮からである。現地形を大きく変えないこと、建物の外観は一階建として瓦をのせることを設計の基本とする点も最初の会議で決定された。71年度末には設計案もほぼまとまって建設省近畿地方建設局の手で地形測量、ボーリング調査などが始まった。72年度には5月から8月にかけて当研究所が敷地の事前発掘調査を行った。実は当初この敷地が狭い谷間の傾斜地であることから恐らく頗著な遺跡は存在せず、念のため発掘だけは実施しておこうと考えて着手したのであったが、思いがけず敷地の東寄りで斜面に沿って北から南へ下る石組暗渠が発見された。その詳細は既に前年度の年報で報告したとおり7世紀中頃、まさに飛鳥地方の宮廷文化が栄えた時期の遺構である。全貌が未確認のため用途・性格を明らかにし得ないが、形状や技法からみてもユニークな重要遺跡である。そしてこれを保存するため急遽既に実施設計もかなり進行していた建物の平面や配置の設計変更をおこなった。最初の案では前面の展示棟が東へ延び、背後の事務棟が西へ延びる平面であったのを、展示棟の東端が暗渠上へかかるため左右反対に折り返し、棟の方向も斜めに振って暗渠より西の地区で本館がどうにか納まるように修正したのである。こうした建物平面・配置の変更により



第1図 飛鳥資料館建物配置図

飛鳥資料館の建設



第2図 建物平面図

敷地内の道路や屋外展示計画も大きく変り、当初は展示品搬入が東の丘の裾の目立たぬ部分で行われるはずであったが、逆に西側境界ぎりぎりに搬入路や屋外作業場がとられることとなつた。また本館東側地区は附属建物や通路などの日常的施設は全く置かれず暗渠遺構を中心とする屋外展示場として整備される方針も決った。元来この敷地は南から1/3ほどの処に東西に小川が流れていて建物の有効敷地は北側2/3の部分に限られていたのであったが、暗渠遺構保存のためにさらにその東寄り地区を利用し得ぬこととなり、設計者の苦心は倍加したのである。それでも事務棟東端と暗渠遺構との距離は5m弱と近接し、またこの附近での暗渠上面の高さは建物周辺整地面より1.2mほど上ることとなつた。

72年12月には用地買収も完了して、16,902m²にわたる敷地が確定し、73年2月の設置準備会で設計案が最終的に決定され、同会は解散すると共に資料館設立業務が当研究所にひきつがれた。同じ2月に建物の建築工事が起工された。実施設計と管理は近畿地方建設局、工事請負は村本建設株式会社である。そして1973年度では本館建物のみ竣工し、74年度は車庫・売札所等の附属建築、本館正面の小川に架る橋梁、周囲の土塁及び門、構内のランプウェイや舗装工事など主として外廻りの工事が継続実施されている。

本館建物はRC造、地上1階、地下1階、床面積は2,440m²(1階・1,223m²)。東西に長い展示棟と研究・事務等の管理棟を前後に置き、中間を資料閲覧室で繋ぐ構成で、展示棟の地下を倉庫、管理棟の下を工作室、写場、機械室、中間棟の下を講堂に充てている。

飛鳥資料館は、飛鳥地方の飛鳥時代(平城遷都まで)を中心的に扱う歴史博物館である。わかりやすく、しかも内容のある展示を目標としており、資料閲覧室では飛鳥研究の基礎資料をとのえて閲覧するなど、普及面においても特色をだせるように計画している。また地下の工作室、荷下場やその前庭などを、発掘調査や遺跡整備事業の基地としても有効に利用することを考慮している点も、遺跡の近くに所在する当資料館の特色の一つである。

(佐原 真・鈴木嘉吉)